

(誰もが読めるわけではない)の書簡集に当たらないければならないのが不便であるだけでなく、編集されて削除されたカルティニの言葉を詳らかにするという本書の問題関心がはやけてしまう。1987年の全書簡集の中に収められている書簡をいくつか読んでみると、直接的な筆致でカルティニの自由な考えや思い、感情が綴られている書簡もあり、著者が指摘するように全書簡集の出版によって初めて生身のカルティニの声が聞こえるようになったことがわかる。一方で、それは私信である書簡が公開されたということであり、カルティニをよく知るアベンダノンが取捨選択し、時には「切り貼り」して書簡集を出版した理由の一つでもあるのだろう。それゆえに *Door Duisternis tot Licht* (直訳は「闇を通して光へ至る」)(p.3脚注)と題された1911年版は、いみじくも著者が指摘するように史資料ではなく「物語」として読むべきなのである。

本書ではカルティニについての先行研究が丁寧な調べられているが、1987年の全書簡が出版された後の研究に言及している中で、コーテ(J. Cote)の一連の研究成果を「筆者が批判の対象とするインドネシア民族主義の中に位置付けられたカルティニ研究に関する叙述を、超えるものではない」(p.23)と簡単に片付けてしまっているのは、コーテの研究の方法論が著者のものと近いこともあるだけにもう少し詳細に紹介し、研究の観点の違いが述べられていると本書の意義がより明確になったのではないかな。もう一点、本書の題である「小さな学校」について、どういう意図でこの題としたのか「結語」(p.351)の中でやっと説明されるが、その題に込められた意味の説明が原文とともに冒頭でされる方が読者には親切だったと思われる。

英語ではカルティニの書簡集の全訳がコーテによって出版されているが、未だ邦訳は出版されておらず、著者の手による日本語版の出版が望まれる。

最後に本書の構成を紹介しておく。

序章 *Door Duisternis tot Licht* と *Brieven*

第1章 背景——閉ざされたジャワ社会の下で

第2章 カルティニの生涯

第3章 カルティニの読書

第4章 カルティニの社会活動——ジュパラの木彫工芸振興活動

第5章 失われたカルティニの声を求めて——カルティニの理想と現実

第6章 「光と闇」をめぐる——1911年版書名と編集の考察

結語

カルティニの全書簡を再解釈することにより、著者は「カルティニは相異なる文化価値の仲介者であり、従来から言われる単なるオランダ語による仲介者とは全く異なる。同時に、カルティニは貧困を社会の問題と捉え、社会的に弱い立場にある人々に寄り添いその声を代弁した」(p.349)と結論づけている。書簡から聞こえるカルティニの心の声に耳を傾けて書かれた本書は、著者が師と仰ぐ土屋健治が28年前に『カルティニの風景』[土屋1991]で描き出したカルティニの心象風景をより広げることに貢献するものとなっている。

(森山幹弘・南山大学国際教養学部)

参考文献

- Kartini. 1987. *Brieven aan mevrouw R.M. Abendanon -Mandri en haar echtgenoot met andere documenten*, compiled by F.G.P. Jaquet. Dordrecht; Providence: Foris Publications.
- 小林寧子. 2018. 「国家・英雄・ジェンダー——カルティニ像の変遷」『歴史の生成——叙述と沈黙のヒストリオグラフィ』小泉順子(編), 23-73ページ所収. 京都: 京都大学学術出版会.
- 土屋健治. 1991. 『カルティニの風景』東京: めこん.

細田尚美. 『幸運を探すフィリピンの移民たち——冒険・犠牲・祝福の民族誌』明石書店, 2019, 395p.

著者のフィールドワークは、2000年から2017年までの間にフィリピン・サマール州カルバヨグ市

にあるパト村（仮名）という移民の出身村と、移住先であるマニラの「分村」で実施された（その内、村での住込み調査はのべ2年半に及ぶ）。本書は、そのような長期間にわたる、参与観察と聞き取り調査（その中心は29人を対象としたライフヒストリー）という質的調査だけでなく、世帯調査など量的調査によって得られた、まさに「分厚い」データにもとづいて書かれた民族誌である。ただし、書評の最後に触れるように、パト村の村民と出身者に対する密度の濃い調査によって書かれた民族誌であるだけに、一部に「パト村中心主義」とも表現できるような問題点を有することは否めないことである。

評者自身は、台湾でインドネシアの、おもにジャワ島出身の介護／家事労働者（女性）と漁船員（男性）の人類学的な調査を2010年以降、断続的に実施している（その成果の一つは小池 [2019]）。そのような片手間の調査とは根本的に異なる、調査期間だけでなく、調査テーマの掘り下げという点でも、まさに本格的なフィールドワークの成果が本書では展開されていて、ほんとうに読み応えのある民族誌になっている。

フィリピンの移民に関する研究は国内外において経済学・社会学・文化人類学などの分野で、すでに数多く公刊されているが、本書の最大の特徴であり、その学問的貢献といえる点は、題名にある「幸運を探す（サバララン）」と、副題の「冒険・犠牲・祝福」という3つのキーワードによく表れている。村人を移動にかりたてる理由は、たんなる経済的要因や社会的ネットワークだけで説明できることではなく、著者がとくに注目するのは、「幸運探し」という「冒険」にもつながるような移動の意味付けであり、これは「犠牲」と「祝福」という信仰実践（カトリックだけでなく、ローカルな霊的存在も含む広義の信仰）と密接に結びつく概念である。このように、「双方親族」や「ネットワーク」など頻出する人類学の分析概念に依拠して移民という現象を説明するのではなく、「移民たちの観点からみた移動を描く」（p. 20）ことが、本書の魅力となっている。

本書は、序章と終章のほかに、3部に分かれた計8章から構成されている。以下に、各章の内容

を概観する。

序章「冒険とつながりの民族誌に向けて」では、本書のもととなった調査と、本書の目的とキーワードなどをまとめている。つづく第一部「サマール島における人の移動」は2章からなる。第一章ではマクロな視点からサマール島における移動を概観している。第二章では、サマール島西岸に位置するパト村という農漁村に焦点を当てて、そもそも村自体が移住によってどのようにして形成されたのか、そして現在に至るまでの村人の移住史と移動パターンを整理している。ここで興味深いのは、女性のほうが男性よりも都市部に向かう傾向が強く、より若い時点で労働を開始するというというジェンダー差である。

第二部「運命とサバララン」では、本書の中心的テーマであるサバララン（幸運探し）を取り上げている。第三章ではサバラランという語の意味を検討する。村人は自らの意思で「幸運（豊かさ）」を求めて移動するが、それはリスクを伴う行為であることが確認される。つづいて「サバララン最前線」としてのマニラを取り上げ、マニラに形成されたパト村出身者の二つの「分村」が成立されるまでの経緯を記述し、分村ができたことで村人にとってサバラランに含まれるリスクが低減されたと述べている。この章の最後に「新たなサバララン最前線」としての外国を取り上げ、海外への出稼ぎだけでなく、国際結婚の動向についても言及している。第四章では村人のライフヒストリーをもとにしてサバラランの具体的な過程を明らかにする。最後にサバラランに対する評価が描かれ、肯定的な評価だけでなく、否定的に捉える村人もいることも触れられている。

第三部「幸運を通じたつながり」は、「幸運」という概念について宗教的側面と社会的側面からアプローチしていて、本書の中心をなす議論を展開している。第五章は、サバラランとの関係から村人の信仰実践を鮮やかに描き出している。普通ならフィリピン人の宗教生活を「フォーク・カトリシズム」という枠組みで分析しがちであろうが、本書の独創的な点は、不可視の「友だち」という霊的存在から第五章の記述を始めていることである。「タンバラン（呪医）」は「友だち」の力を頼つ

て治療行為をおこなう。また、時空を超えて「友だち」が「幸運探し」に関わる事例を紹介する。つづいて土地の神や祖霊に言及した後、パト村の住民の9割を占めるローマ・カトリックに関わる信仰実践を詳細に論じている。「幸運」と密接に関係するのは神の祝福であり、その前提になるのがサクリピシヨ（犠牲、神に捧げる行為）である。「家族のため」という言葉に典型的に表現されるような利他的行為をする人が幸運を授かるというモラルが村びとの規範として重要なのである。

第六章ではブオタンがキーワードになっている。「ブオタンな人」というのは、村人の中で非常に重視される評価であり、「神のような慈悲の心に基づいた分け与えをするモラルに準じた人」(p. 26)を指す。この章ではパト村における家族・親族関係を「食の共有」という点から論じている。「食の共有」に象徴されるように助け合うのが親族なのである。このような親族論は、序章で触れているようにカーステン (J. Carsten) の「つながり (relatedness)」という概念を参照し、血縁にもとづく「である関係性」よりも「食の共有」などによる「になる関係性」を重視している。故地の家族に対する移民のパダラ（送金）やパサルボン（贈り物）は、「幸運の分け与え」という意味をもち、家族・親族というつながりの再確認の契機となっている。

第四部「つながりの揺らぎと再編」は、「分け与え」によってできる「つながり」という理念が都市部に移住した人びとの間でどのように揺らいでいるかを論じている。ここで議論の焦点となるのは、富の分配をめぐる日常的に起きる対立やすれ違いである。第七章では、「複ゲーム状況」[杉島 2014] という概念に依拠して、「家族・親族は助け合う（相互扶助）」という理念が、実際に棚上げされたり、一部変更されたり、また強い強制力を持ったりする場面を取り上げる。最初に、相互扶助と自助努力という理念を状況ごとに使い分けてマニラの分村で生き抜いている「成功者ジェイ」の事例と、相互扶助を拒否する「逸脱者ラケル」の事例とを対比させて議論を進める。また、ジェイは麻薬密売をしているという噂もあり、ジェイを避ける村人もいる。一方、教育を受けて最後は公立大学の教員となり、カルバヨグ市の郊外に住

む「プロベシヨナル（ホワイトカラー職員）アレヒン」の事例にも言及する。自助努力を重視するアレヒンは、出身地パト村の親族には経済的援助をせず、年に一度フィエスタの時にしか村に行かなかった。この章の最後に「幸運者」という称号で呼ばれる富を得た村人は、自助努力と相互扶助の複ゲーム状況を巧みに生き抜く「両立者」だと論じている。

第八章は、出身村とのつながりが消える人がいるかどうか、そして消えるとしたらどのような状況なのかを検討している。マニラで暮らす移民二世は、パト村で使われるワライ語を話すことができず、頻繁に村を訪れることはなくなっている。しかし、守護聖人への願掛けという宗教的なつながりが維持されているケースもある。また、中間層住宅で暮らすようになったロイダはアドベンチスト教会に改宗し、村とのつながりは薄らいだが、それは固定的なものではなく、状況に応じて村とのつながりを強化することもある。さらに著者は海外で暮らす国際移民と村とのつながりを検討する。国際結婚した女性と比べると、海外就労者は定期的な送金という形で近親者とのつながりを維持する傾向がある。ただし、海外で村のモラルとは異なる価値体系に触れ、価値観の変化によって村とのつながりが極端に弱まることもある。ただし、必要によっては村とのつながりが再活性化することもありうるのである。

終章で本書の内容を総括し、さらに本論とは異なった角度から幸運とつながりという概念を再検討し、本書を結んでいる。ただし、「カジノ資本主義」や「土地の持ち主」という概念を唐突に持ち出すのは、これまでの本書の議論を考えると蛇足といえよう。

評者が本書をもっとも評価する点は、従来の文化人類学の分析概念や定型の記述のパターンにとらわれずに、「当事者たちの具体的な行為やかれらによる意味づけを分析の出発点とする」(p. 194) ことである。このような本書の長所のために、退屈な思いをすることなく、395頁に及ぶ大著を新鮮な発見に導かれながら読み進めることができた。当初、本書を読み進めながら、移民を送り出す家族・親族に関する記述はどうなっているのかとい

う疑問がすこし感じられた。しかし、第六章に至り、その疑問は氷解し、本書の構成の巧みさを感じるようになった。従来のオーソドックスな民族誌だったら、第五章は「バト村の宗教」になり、第六章は「バト村の社会関係と親族」という平板な題目が付いていたのかもしれない。そうではなく、「第五章 祈りの世界のサパララン」というタイトルの下に、幸運を探しに移民に出る村びとの宗教生活を「友だち」という不可視の霊的存在も含めて鮮やかに描き出し、そして「第六章 プオタン精神がつなぐ移民と村の人びと」では「つながり」という視点から移民と家族との関係を論じている。本書はまさに全体論的な視座から豊富な事例を使ってバト村の移民の多様な姿を描くことに成功している。

本書全体を通して残念な点は、上記のような長所が最後まで首尾一貫して守られていないことである。第七章は「複ゲーム状況」という分析の枠組みのなかに押し込まれて議論が進んでいるように感じられるし、すこし議論が平板だという印象を受ける。もちろん「複ゲーム状況」という概念自体の有効性をここで否定するわけではないが、本書を通していたトーンが、この章ですこし乱れているのは確かである。また、「図7・1 村出身者の間にみられる富の量と富の分配範囲の相関」(p. 285) という図とその説明は、別の意味ですこし不満に感じる点である。社会的・経済的に成功し都市の郊外に住むアレヒンを「分配範囲が狭い」一人に位置付けている。もちろん、ある時点で固定して、人びとの関係性や富の分配を把握するという意味では、この図のような分析手法は妥当である。しかし、より動態的にみていけば、アレヒンはバト村という社会空間を離れ、村とは異なる都市郊外という空間のなかで、それに見合った社会関係を築き、またパナイ島出身の妻方の親族との間にはじゅうぶんに「分け与え」が認められる。本書は人の移動の研究である以上、バト村という定点にこだわり過ぎることなく、より柔軟に次から次へと人が移動先で築きあげる多様な「つながり」にも、それ相応の注意を払って調査研究を進めることこそ、著者が主張する「幸運探し」の実態に合っているように考えられる。「バト村中心主

義」と呼べるようなことは、著者による長年にわたってフィールドに深く入り込み、村出身者との間にラポールを築き上げてきた調査の些細な問題点ともいえるかもしれない。

(小池 誠・桃山学院大学国際教養学部)

参考文献

- 小池 誠. 2019. 「台湾の高齢者介護を支えるインドネシア人移住労働者」『比較家族史研究』33: 56-79.
- 杉島敬志(編). 2014. 『複ゲーム状況の人類学——東南アジアにおける構想と実践』東京: 風響社.

				増原綾子; 鈴木絢女; 片岡 樹; 宮脇聡				
				史; 古屋博子. 『はじめての東南アジア政治』				
				有斐閣, 2018, xxi+302p.				

本稿では、はじめに本書の概要と特徴、そして東南アジア政治の入門書としての本書の強みを述べ、続いて本書の構成を概観する。最後に、本書の強みと対を成す本書の弱みについて評者の考えを述べたい。

本書は有斐閣のテキスト・シリーズ「有斐閣ストゥディア」から出版された、「大学に入って初めて東南アジア政治を学ぶ学生を主な読者としてつくられたテキスト」(p. i) である。本書の狙いは、東南アジア政治についてほぼ知る機会のなかった読者に理解を深めてもらうことであり (p. iv), また、読者が本書を批判的に読むことで多様な視点から東南アジア政治を考察すること (p. iv), 東南アジア政治の面白さに気づいてくれる読者が出てくること (p. 289) を期待する。本書の著者たちはいずれも中堅の東南アジア研究者であり、その研究対象地域はインドネシア、マレーシア、タイ、フィリピン、ベトナムと幅広い。またそれぞれが地域研究だけでなく他の学問分野(比較政治学、文化人類学、宗教社会学、国際関係論)にも精通している。多様な地域的・学問的背景をもつ著者たちによる本書は、以下にみるように、東南アジア政治に対する幅広い視点を読者に提供している。